

靈感と感応の違い。混同を乗り越えて感応道交へ

森 下 龍 浄

一 靈感と感応のどこに問題が

「誰ぞ快刀乱麻のサバキを」と思いながら数十年。動きがないから問題提起として靈感を取り上げた。世間の仏教書・人文書にも靈感など雑な記述。靈感・霊能者のご託宣を面白くセンセーショナルに取り上げるTVなど、混乱させてばかり。根底にあるのが「靈魂」イメージ。加えて、感応との取り違い・混濁・錯覚があり、これでは「感応道交」が汚れて見えなくなる。放置した宗教者の責任は重くないのか。慰霊信仰が大衆レベルなのはまだいい。信仰世界がこうも「靈魂」に汚染されては仏菩薩に面目が立たない。

辞書のレベルを見ておこう。これが定義とかカバリー範囲とか、「曖昧模稜な靈感世界を語っている」程度。精神世界？のことだから本質を衝く「語彙」を造語・案出できないというやむを得ない面もあるが、感応道交という鏡に映して正確な記述はできないものか。感応道交の「監修を受けた」のち、世に出してほしい。

靈感……「人の祈願に対して現れる神仏の反応」とあり「神霊の感応」とも記す。ちなみに感応は「神仏に通じて」としてあり、この部分に限っては明快だが、神霊とくれば「神様の霊」「神の中の霊」とも「神と霊」とも読めてしまう。混濁の一例である。

霊媒……「神霊や死霊などと交流しその意志を媒介・その能力ある人」「靈魂を乗り移らせて、死者に替わって口を

きく媒介者」。ここにも神霊とあり、注意が必要。

霊能……「能」の文言だが、そもそも霊というものが何なのか定義がない。究められてない。霊魂だとしても、ここに能力・パワーというものがあるとも思えない。メディアなどから伝わってくるのは「外郭を大雑把に撫でてはいるが、よく分かっていない」状態。背後霊・地縛霊・心霊という言葉も混乱の元。

霊感。それはなんとまあ、心優しい人・信仰者に共鳴する言葉か。そこから生じた大誤解が心優しい人をあらぬ方向に導くのだとしたら。

二 法華経に照らした時、浮かび上がる混濁と混乱の現場

a 「○○霊がお茶お経募参を希望ですよ」このようなご託宣は多いもの。「これを解くカギは数代前のご先祖にあるのですヨ」などもある。問題ありも、問題ナシも、とにかく先祖バージョンというのが語られる。「先祖のおかげ」は言わずもがな、当たり前のこと。しかし「おかげ」をないがしろにしたから祟るのだろうか。やがて自分も先祖の仲間入りをするは必定。想像してもみよう、先祖になった自分を。最愛の子孫が「報恩感謝のつとめ」をしないからといって祟るか。その言葉を使わなくとも、子孫を病気にするか、破産させるか、不幸ゾーンに導くか。

b 多く、欲望充足の祈りを捧げるのが人間の常態ではある。しかし教師が、法華経の行者がいつもそこだけに標準を合わせているだけでは、教師故に堕地獄となろう。祈りの現場を見た識者が「守護神などの神々を使役する」と受け止めたのもある。「使役。ウーン」と反論したくもなるが、その課題やヒントは当方を衝く。なかなかの難問ではなからうか。

c 「霊感？ん？一部の人じゃないのそれって」という反応の人も多いよう。一部であるには違いないが、霊感をめ

ぐって「胡散臭さ・摩訶不思議・憧憬」などが入り混じった「異物」を見るような視線ではないのか。異端・異物なのだろうか。だとしたらそれは排除の姿勢からしか出てこない。そうではなくて、「発展途上」と見るのが教師の基本姿勢ではないだろうか。

d 日本国中「靈魂中心の祈り。骨崇拜」だといわれる。靈感を取り巻く混沌も信仰の迷いも不安も、時に世間から指弾される寺院の「営業モード」というレッテルもここを土台としている。底流にある「先祖を慰めてくださればいいのですから」という檀家の温かい心根に押されまくっている。骨・墓石・墓参・位牌・仏壇。死者による生者支配装置という、生者の幻想が作り出した歯車に組み込まれてしまっている。どう対応すればいいのか。これまた難問だと言えよう。別言すればかくも人々を苦しめる靈魂。不成仏靈などという卑小な「異言」をモンスターにしたのは日本仏教の特色なのか。

e 信心深い人と不信心の人がいる。それらには架橋がなく断絶している状態。信心深い人は多く迷信の人（信者の見本）でありそれが架橋の妨げとなっている第一要因。迷信の人が纏う外套に惑わされずに、その真奥を、その奥から発せられる言動を受容するは容易ではない。「袋きたなしとて黄金を捨るなかれ」の矜持を持つのは難しい。ましてや信心も迷信も靈感と大いに親和性がある。

三 靈感體質者と「寄台」

昔は「狐憑き」というのがしばしば見られ、単純に「野狐」とも呼ばれていた。言葉は「野狐禪」という禪系統から来ているらしい。仏教本来から外れた「異安心」「外道」の信仰。異端の系譜。これなど、憑依者の典型例だった。いわばあちらとこちらを融通自在に通行している人、ともいいたい。これらも身体的言語的挙動で憑依者とするかどうか、特に験者の悟りや立ち位置が問われよう。責任は重大といえる。「憑依」でくくってしまうことの不明。

霊感体質という視点がある。素直に信仰する人に、たまに見受ける憑依者・靈感呪者。多くは体質から来ている。「全能感・高揚感・絶頂感」などの特質をもつ霊感体質者に圧倒され押し流されぬよう細心の注意を払いながら、霊感体質と感応との分岐点を探ってみる。境界が曖昧模倣なのではない。間に汽水域があつて、うつすらと見える潮目のような境界。

そこに「寄台」という概念を置いてみる。それは渡り廊下でもあり時として迷路だから、罪作りの装置といえる。しかしこの問題を整理するパイパスにはなり得る。方程式にXを置くのに似ている。説明こそつかずとも、感応理解に一步二歩は近づくのではないか。元々は多く霊感体質を持つ純粹な信仰者。そこに、靈感を獲得したい売りにしたあの動機で接近する法華経僧も多々あろう。そして寄台として「使役」することの不遜と無明。なかなかずく奇異なのは「霊能者に拝跪する」教師。これでは霊感体質者・靈感者に対して指導などではしない。更に寄台その人を考えれば、今の人生、先の人生をどうする。法華経信仰に誘うどころか、イタコ・口寄せレベルに止め置くなど無慈悲に過ぎよう。寄台育ての過去に先祖返りしてはならない。あくまで概念として考えてみるのである。

四 混乱は大衆のみ？。教師に迷走はない？。感応とは難問なのか。関門なのか

「靈感？ 関係ない」では後輩教師は落胆するだろう。なぜ腰が引ける？。なぜスルーしてしまう。法華経校への不登校？ではないのか。感応靈感混合のリテラシー研修を受けねばならないだろう。截然とは分けられないのがこの分野の特徴。肌感覚でしか掴めないところに受容の難しさがある。意識を持つて靈感の森に分けいった少数者がそこに屹立している感応道交を見る。森に入っただけでは見えない。

靈感ありとラベルを貼られるのも教師としては恥。靈感ありと感応ありと持ち上げる也大いなる無明。持ち上げられて否定せぬは大恥となろうか。

a 混濁錯綜の放置は靈感感応双方に有害。ともに発展途上と捉えてこそ視界が開ける。靈感は、修行によつて研かなければならない粗削りの段階といえる。正解不正解混濁の山で【反復ドリル学習】をしながら、感応側にまづは一步を踏み出そう。

b この混濁状態も世間ではまあ致し方ないところだが、法華経教師は本物を見分ける立ち位置を自覚すべき。その根幹は真の法華経受容。法華経に包摂するためには「ああそれもいいこれもいいでしょう」といった領き方はダメなのではないか。

c 神意……「神様の意」にあらず「天の意」と受け止めるべきで、「天の」と言う時、福沢諭吉のソレに通じていよう。

d 感応道交とは、法華経そのものの発露で露頭。靈感と対置するは不敬。教師は日々「天空の高みから眺めることができる」感応の中に生きている。それは降る星の如く、気づかずともシャワーの如く、だ。しかも前髪を掴まなければ下流に流れ去ってしまう。自己研鑽と反省を怠ると靈感状態に停滞する。そこは霊（真偽不明所在不明）発メッセージで真文の感応とは似ても似つかぬシロモノ。「霊山往詣」ではなく法華経者の今この場所が霊山では。ならば聞こゆるは金言であるはず。

e 感応道交やご利益はシンクロニシティ。現実とのシンクロ・カミと我とのシンクロ・大きな生命の流れと我とのシンクロ。数々の天啓と冥祈顕応などなど。春秋の筆法を借りれば「感応は心に道交は色に」といえようか。人は死す。しかして天上の星となるとした時、降る星が感応道交。霊から繰り出される五感六感などではない。みがきこまれた靈感究極の感応道交があるのではなく、感応道交に包摂されるものと認識すべきでは。

f 「法華経……真文……感応」とおっしゃっているではないか。ここを一直線に、お言葉に素直に。できないならば、違背の大罪ではないのか。蒙古予言例を引いて、なぜ日蓮聖人のようにと思わないのか思っていないのか。

宗内にさえ「蒙古襲来予言は宗祖独自の情報網から」と解説した高名の教師もある。それを予言というのか。「頭に大覺世尊……」をどう読むか。議論の余地は絶無のようだが。

五 それから先の地平

靈感と感応の混濁を傍観すべきでない。その混濁を浄水場に引き込み汚泥と浄水を分けようとしても、それは不可能。悪貨は良貨をほぼ駆逐し終えている。仕分け作業は断念して感応注視あるのみ。彼の世界（靈感ワールド）に比し、この世界この任務には必ず冥助がある。ではどうすればいい。靈感と感応と感応道交と三方向から考えた方がいいように思う。しかも、あくまで研鑽・ドリル学習か「ディベートもどき反復ロールプレイ」で深めて行く途上に天から降ってくる、見えてもこよう。成仏に似て到達点があるわけではない。この連続が感応道交の地平を開く。

これはその研究途上ですらなく問題提起である。新規提案ではなく「教化の障害を取り除く」が主眼。誤解を減らさねばならない。当論考は糸ほぐしマニュアルではなく、悩みへの誘いである。広くご批判を乞う。

安国論の遺戒「寸心を改め」は為政者への文章だが、それから実に八百年も経過。いまこの足元の「混乱」は勝れて法華経者単独指名の課題ではないのか。「汝早く、」を聞いて火の粉を恐れる暇はない。

例えば各山各寺の守護神。祈るに感応ありやなしや。「この山の繁るや妙の一字なり」の身延山句碑を知ってしまった今。